

土のある暮らしと文化

土の豊かさ

土との初めての出会い

土は、20年ほど前、私が建築の設計をはじめた時から取り組んだ材料だった。

「神長官守矢史料館」という小さな市立博物館を、生まれ育った田舎の長野県茅野市に建てることになり、内外の壁を土で仕上げようと考えたが、改めて検討してみると、土を使った現代建築はない。少なくとも20年前にはなかった。

参考にする前例のないまま工事ははじまり、いよいよ仕上げをする段階に入ると、二つの難問にゆく手をはばまれた。

一つは外壁で、土は冬の凍結融解に弱く、普通のままに作るとまず保たない。建築材料の研究者に問い合わせても、左官材料に詳しい専門家にたずねても、凍結融解に耐える土なんて聞いたこともないし、そんな研究をし

ている人も知らないとの返事。

しかたなく家の冷蔵庫を使い、土とセメントを混ぜたりボンドを加えたりして実験したが、土らしい風合いをよく残す実験体は崩れるし、土らしさが減れば大丈夫だが、それでは土を使う意味がない。ようするに土と感ぜられる状態である限り、凍結融解は避けられないのだ。

難問のもう一つは室内で、壁と床に土を使いたいが、維持管理が難しい。土の床をどう掃除すればいいのか。確かに、掃除の度に床は削られて減ってゆくにちがいない。水拭きなど絶対にできないし。

内外の問題にゆく手をはばまれ、結局、白セメントを土色に着色し、ワラスサ(※)を混ぜ、コテで粗く塗り、その上にノリ入りの本当の泥をハケ塗りして済ませた。

苦肉の策にちがいないが、けっこう土らしく見え、以後、建築界では、珪藻土に他の物

質を混ぜた土風仕上げ材が流行るようになる。珪藻土系の土風材料の開発には、大阪ガスが築炉用に開発した材料が転用されたと聞いたが、詳しいことは知らない。

以後、本当の土ではなく自分で工夫した土風仕上げを使いつづけて今にいたるが、その間、ずっと、土については注意を払い、あれこれ取材もしてきた。

たとえば仕上げ用の土としてあまりに名高い「聚楽土」。秀吉の聚楽第建設の時、敷地から出た土を壁に塗り、余った土で利休が長次郎に楽焼の茶碗を焼かせたと伝えられる。以後、長次郎は「楽」の姓を名乗る。

取材をすると確かにそのとおりで、今も一軒だけ土屋さんが旧聚楽第跡の地籍で土を採ってはいるが、掘り出せる量がごく限られ、楽家に納める以外は、茶室用にわずしか供給していないという。

東京に送ったことなど一度もないそうだ。

ということは東京の高級料亭の壁などに塗られた聚楽壁はみなニセ聚楽になってしまう。

泥の建築の衝撃

もちろん、土を全面的に使った世界の建築も訪れた。二つ紹介しよう。

一つは、アフリカのマリ共和国のジェンネに立つ「泥の大モスク」。世界遺産でもある。

サハラ砂漠の南の縁をニジェル川が流れ、その南側には、いわゆるブラックアフリカが広がる。サハラ砂漠の北は地中海で、対岸はヨーロッパだ。ジェンネは、サハラ砂漠を越えてのヨーロッパとブラックアフリカとの交易の拠点として大いに繁栄し、ヨーロッパからは綿製品やガラス製品などがキャラバン隊によってもたらされ、アフリカからは象牙や金が送られた。

ジェンネには、アフリカには珍しく大都市が形成され、その宗教的拠点として作られたのが「泥の大モスク」だった。

サハラ砂漠の縁を流れる大河ニジェルに面しているから、泥はいくらでも採れるが、しかし、森も林もないサバンナ地帯だから、人々は、日干し煉瓦で家を作る。煉瓦というけれど名ばかりで、乾いて固まった泥のこと。

パリからマリの首都バマコに飛び、砂漠を2日かけて横切り、ジェンネに着いた。人口3千の町は、見渡す限り泥の家ばかり。そのただ

中に大モスクは、広場に面してそびえていた。

知らなければ現実の光景とは思えないだろう。高さ20m、横幅100mの泥の建築。土だけでできた建築。

初日は茫然と眺め、2日目になって、なぜ現実とは思えないような建築光景になったのかを考えた。

緑が一つも見えないこと、窓がどこまでもないこと、町のすべてが泥でできていること、さまざまな理由はあろうが、私が深く興味を持ったのは、泥の建築の本質についてだった。何か変なのだ。これまで見てきた古今東西の建築とはちがう。各部の形や色や全体の構成がちがうからだけでは、ない変なちがひがある。しばし考えた。

建築用語でいうなら、メジがない。“目地”と書いて、継ぎ目のことをいう。どんな建築にも壁と窓枠の接点とか、タイルとタイルの間とかに目地の線が現れるというのに、どこにもそうした継ぎ目がない。

建築にないどころか、広場と建物との間にもなく、今、立っている広場の土は、そのまま向こうに伸びていって、立ち上がって壁となり、上り切って水平の屋根へと変わり、向こう側で、また壁となって下り、道になり、さらに家々となる。

泥の町、泥の建物には、どこにも継ぎ目が生じない。

初めて眼にした目地のない建築。目地がなければどうしてこうも変な印象になるんだ



ジェンネの泥の大モスク。特徴は、壁の補強バットレス（控え壁）の先が尖ること

ろう。姿形は建築だが、どこか建築とは質がちがう。

再びしばし考えた。

生物にも目地はない。1本の樹にも、リンゴやバナナや人の身体にも継ぎ目はない。朝起きて鏡を見たら、ホホのあたりに1本継ぎ目が走っていたら嫌だろう。継ぎ目に入った汚れを取ろうと洗ったら、水がしみてきたりしたらどうする。

どうして生物体には目地がないのか。

理由は簡単で、どんな複雑な形をした生物でも、一つの細胞の増殖によって生まれ

たからだ。

ところが建物は、そうして生まれた自然界のさまざまな物体を集めてきて、組み合わせ、重ね、継ぎ合わせて作る。

目地は、人工物と生物を分ける指標である。ところが無垢むくの土で作られた日干し煉瓦の建物には、その目地がない。とすると、泥の建築は生物と人工物の中間的存在ということに、視覚的にはなる。

私にとってこの認識は、大きな発見だった。泥の建築、土の建築は、人工物からズレ、自然に一步近い。

似たことを、アメリカ中南部の乾燥地帯のサンタフェに立つ「聖アッシジ教会」の泥の建築からも感じた。やはり泥を材料とする日干し煉瓦で建てられている。

日干し煉瓦を積んで作った壁には一つの弱点がある。ジェンネのモスクくらい厚く積めばいいが、そうでないと壁の一番下の部分がしだいに外に向かって孕はらんでくる。上からの過重で、壁の下部が外側にズレはじめるのだ。このズレを止めるには、孕みはじめた下部の外側に、さらに厚く日干し煉瓦を積んで押さえつけなければならない。「聖アッシジ教会」では、そうして積まれた土が、とりわけ崩れやすい角に積まれた土が、あたかも若い女性のハリのある乳房のように見える。

当初から積まれたわけではなく、年月の経過とともに孕み、押さえ、また孕み、また押さえを繰り返し、今の乳房型にいたった。年

とともにしだいに成長したのだから、生物に近いともいえる。

ジェンネと同様にサンタフェの方も、建築という人工物からちよつと自然側にズレた視覚的性格を持つ。

二つの建築の先にある土の魅力

世界を代表する二つの泥の建築によって、建材としても土の面白さを知った。でも、土や泥の奥深さには、その先があった。

その先を予期させる二つの経験から述べよう。一つは、宮城まり子さんに頼まれて「ねむの木こども美術館 どんぐり」を作った時、屋根のてっぺんに土を盛り上げ、芝草を植える工事を私の陣頭指揮の下、学園の子どもたちと「縄文建築団」でやった。「縄文建築団」とは、私の工事を手伝う素人集団で、赤瀬川原平さんや南仲坊さんを最古参とし、これまで20年近く、十数回におよび工事の一部を手がけている。もちろんボランティア。建築工事には、かならず素人にもできる仕事があるから、スポーツのようにしてやる。

スポーツ同様に本気でやるから、けっこう疲れるし嫌にもなるが、素手で泥を持つてなすりつける作業が終わりに近づいた時、南仲坊さんから「もっとやりたい」の声が出た。

黙々とみな押し黙って作業をしていたから、作業が嫌で無口になったと思っていたのに、

逆で、作業に埋没するあまり無口になっていたのだった。

もう一つ似た経験をしたのは、INAXが常滑に創設した「土・どろんこ館」を訪れた時だった。「どろんこ」のコーナーがあり、子どもたちが何人もで、ビンの口などを使い、ピッカピカのどろだんごを作っているが、なぜ全員が口をきかない。子どもも集団にはつきものの、ワイワイガヤガヤが消え、みな下を向いてだんご作りに励んでいる。係の人に聞くと、いつもこうだという。

縄文建築団の60歳を越えた大人といい、どろだんごの子どもといい、どうも土や泥には、それに手で接した人間の意識を吸収する作用があるらしい。意識が手を通して泥の中に吸い込まれ、言葉が外に出てこなくなる。

土で人を包む世界初の試み

「神長官守矢史料館」にはじまる、以上の土と泥についての体験と見聞と思索を経て、私は、土こそ人間にとって究極の建築材料であることを確信した。そして、「神長官守矢史料館」以来、一度も試みてこなかった本当の土を使ってみようとした。ただし、凍結融解の克服の方法は、まだ見つからないから、内装で使ってみよう。

ただ壁に塗るだけなら民家の土壁や茶室の聚楽壁でなされているから試してみても結果



ルーフハウスの主室の天井。土のドームを作り、照明も土で仕上げた

は分かっている。一つの材料の特性を知るには、点よりは線、線よりは面、面よりは立体によって見る人を包み込むのがいい。で、大きな部屋にドームを架け、その内壁に泥を塗って仕上げれば、住む人、見る人を土で包むことができる。

ジェンネの「泥の大モスク」はじめ世界のほとんどの土の建築は、土の建築とはいうけれど、天井は土ではなく細い丸太を並べた上に小枝や草を敷き、その上に牛フン入りの泥を敷いて仕上げているから、土に丸ごと包まれた感じは味わうことができない。

大きな部屋の壁から天井にかけてをカマボコ状とし、表面に泥を塗るのは、管見によれば世界初の「ルーフ・ハウス」と呼ばれる大きな住宅の主室（居間、調理実験用台所、食堂、応接間を兼ねる）で実行に移された。

さいわい地元がいい土が見つかり、それを若い左官の名人が、あれこれ試し塗りをした後、一気に塗り上げてくれた。土の色も土のテクスチャーも、もちろんコテの跡も見事な土のカマボコができた。

結果は思いもよらないものだった。床の面積は50畳分もある広い部屋の壁と天井が全面土で仕上げられているというのに、「住む人を土で包んでウットウしくな

らないだろうか」という心配もあったのに、ドアを開けて中に入っても、印象らしい印象が湧いてこないのだ。

設計者でさえこうだから、住人の印象はもつとアッサリしていて「そういうわれれば全面土ですネ」といど。

土は、作業する人の意識を吸収するだけでなく、住む人や見る人の視線も吸収してしまう。土は、人間の意識と視線にとってスポンジみたいな存在らしい。

(※) わらなどを刻んだものを使った壁土の補強剤のこと

藤森 照信 (ふじもり・てるのぶ)

工学院大学教授、東京大学名誉教授、東北芸術工科大学客員教授。1946年長野県生まれ。71年東北大学工学部建築学科卒業。東京大学生産技術研究所教授などを経て現職。専門は、日本近現代建築史、自然建築デザイン。建築家の作品として「神長官守矢史料館」「ミラ・ハウス」「ねむの木子ども美術館 どんぐり」など。主な著書は「建築探偵の冒険」(筑摩書房)、「タンポポハウスができるまで」(朝日新聞社)、「建築とは何か 藤森照信の言葉」(エクスナレッジ)など。